

武田薬報

2006
No.1



特集： 今、なぜ漢方なのか/
未来への指標-女性のための医療V

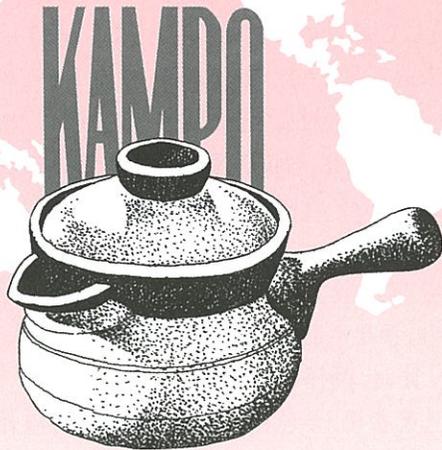
444

コラム .2

慶應義塾大学医学部漢方医学講座助教授

渡辺 賢治
Kenji Watanabe

海外でも 注目される 「KAMPO」



海外における動向

近年欧米においては、伝統医療や代替医療(Complementary and Alternative Medicine: CAM)に対する関心が、年々高くなってきています。アメリカ医科大学協会の125大学のうち82大学でCAMの教育・研究が行なわれています。米国立衛生研究所(National Institute of Health: NIH)に国立補完代替医療センター(National Center for Complementary and Alternative Medicine: NCCAM)が設立され、年間予算約140億円で運営されています。2003年、慶應義塾大学医学部漢方医学講座は、ハーバード大学医学部、香港大学医学部、北京の中国中医研究院と、漢方薬のがんにおける免疫調整の共同調査研究でNIHより助成を受けました(図1)。今後、これに関する継続研究も予定しています。

また、慶應義塾大学医学部漢方医学講座とミネソタ大学医学部との共同研究である、「更年期

障害のホットフラッシュに対する桂枝茯苓丸の研究」については、米国食品医薬品局(Food and Drug Administration: FDA)の許可を受け、2004年11月から臨床治験を行っております。日本では、更年期障害のホルモン補充療法は、あまり普及しておりませんが、米国では積極的に行われており、70歳くらいの高齢者まで対象としていました。ところが、発がん作用や動脈硬化の進行などの副作用が問題となったことから、米国中が一種のパニック状態となり、ホルモン補充療法に替わる治療法の検討が行われました。

2003年米国内科学会(American College of Physicians: ACP)で、私と慶應義塾大学医学部漢方医学講座に留学中のプロトニコフ氏(ミネソタ大学医学部助教授)の共同研究でもある「桂枝茯苓丸の更年期障害に対する研究」が優秀賞を受賞したことにより、一気に漢方治療への関心や期待が高まりました。

しかしながら、治験薬の申請では、エキス剤の剤形では許可されず錠剤に、また用法も1日3回投与を1日2回投与に変更するなど苦労しました。現在、更年期障害のホットフラッシュ180例を対象とした比較試験(プラセボ60例)を実施しており、この結果は2006年に発表する予定です。

漢方の国際化

現在米国では生薬製剤に対して、一部で健康被害や無断で西洋薬を混入した生薬製剤の発覚などがあり、制限が厳しくなっています。一方、日本の漢方エキス製剤は、医療用医薬品として製造され、厳しい品質管理のもとで用いられており、米国はもとより、以前より生薬製剤を用いているヨーロッパの専門家からも、その品質が高く評価されており、世界的に注目されてきています。

国連の世界保健機関(World Health Organ-

ization: WHO)においても、伝統医学に対して用語や情報の統一など、本格的な取り組みが開始されております。そして将来、漢方薬は世界中で10兆円の市場規模になるともいわれており、中国や韓国などは国をあげてこの産業を支援していますが、日本は、戦略面で大きく遅れをとっています。

このため、私どもは、日本の優れた漢方医学をKampo Medicineとして、国際社会に対して積極的に発信し、啓発していく必要があると考え、ハーバード大学と頻りにインターネット会議を開いています(図1)。また、本学にも諸外国から多数の留学生が漢方を学びに来るようになっており、この学生に英語版の動画のテキストを作成し、漢方独特の考え方を説明していますが、十分理解できるようです。証を英語でどのように表記するかなど未解決の問題もありますが、日本の漢方医学は海外でも受け入れられており、今後ますます重要な役割を果たしていくと思われま

図1 NIH International Planning Grant (米国立衛生研究所による国際プラン助成)

